## **論 壇**

えひめ地域づくり研究会議相談役 岡田



散策路の側で、湧水との出会い

とは、日本国語大辞典(小学館)によると、

いささかの違いを感じたい。もてなし

ものではないが、「お接待」と「もてなし」

うに取り扱われている言葉に、「もてな

四国へんろでいうお接待と同義語のよ

し」という言葉がある。語学として論じる

くあることであろう。 化という意味が曖昧になることもまたよ う言葉は何事にも付けられる。そして、文 して改めて考えることはいい。文化とい 動がスタートしている今、 ろ文化が何なのか、私にはよく分からな 舞たうん」92号が特集されるという。へん いが、世界遺産登録を目指してすでに行 地域を結ぶへんろ文化」をテーマに、 地域づくりと

破する人たちもいる。一方で巡拝への志 求めて14〇〇キロメートルを一 けて参拝する人もいれば、 う。八十八ヵ寺の全てを巡拝することが 願し、自らを高めようと、お四国参りと称 至難であることから、 く、多くの人が一度は行ってみたいと願 する旅が重ねられる。その信仰心は根強 寺を巡拝することを通して無病息災を祈 空海が修行した足跡をたどり、八十八カ それぞれの地域にミニお四国をつく 生涯を何回かに分 人生の転換を 挙に踏

南予をドライ 子町にいて、 を果たす。 信仰への願 を巡ることで ブしていて、 畑と我がむら

農の暮らしでおもてなし

淡々と前を向 2 km 3

ている。社会 路さんが増え いて歩むお遍

それで文化なのであろう。 を受け入れる側が自らを変えようとする が人の道から外れれば外れるほど、それ 確実にその数は増えている。それは

ろう。 願いすることをいうらしい。私に代わっ さんに飲食、金銭などを渡して巡礼をお 巡礼のできない自分の代わりに、お遍路 つの風土文化は、「お接待」。お接待とは、 てお参りをお願いしますということであ 四国へんろで高い評価を受けるもう一

①教養、性格などによって醸成された態での間にか「おもてなし」として、地域の会の心意気として使われる。お接待がい会の心意気として使われる。お接待がいた。②人に対する振る舞い方など、一期一度。②人に対する振る舞い方など、一期一

中で光り輝くもの。それは名所であり、名という言葉で説明をすることが多い。観光とは、国(地域)の光を観るとはいつも光とは、国(地域)の光を観るとはいつも光とは、国(地域)の光を観るとはいつもの。光とは、国(地域)の光を観るとはいつもの。それは名所であり、名



商家の二階座敷も「宿」としての接待の場

利にはなるが「両刃の剣」に例えて、いたする時のある新聞の特集に、架橋に伴うの話になるが、瀬戸大橋が開通しようとの話になるが、瀬戸大橋が開通しようと

旅人をもてなすこと 行動することと定義 り輝くものを求め、 とは、よその町のそ 換えれば地域づくり 物であり、 でもある。 したい。 の成果を求めて、光 の成果でもある。旅 化でもある。言葉を にとって誇らしい文 観光とは、 地 域 住民

生活者からすれ 生活者からすれ

るとは、衣食住が整い、自然環境に恵まれ、歴史と文化に包まれた地域とでもいうべきか。よいところに住み着いていると、知人、友人に「ぜひいらっしゃい」とと、知人、友人に「ぜひいらっしゃい」とと、知人、友人に「ぜひいらっまれたり。よいとこうべきか。よいところに住み着いていると、知人、友人に「ぜひいらっしゃいますね。」といわれたい。よいところとは、衣食住が整い、自然環境に恵またくなる」。「観る」といわれたい。よいところとは、衣食住が整い、自然である。



内子の品格としての町並み

タリティとして、

からはじまるホスピとを指摘した。お接待れると言ったようなこれることだって懸念さ

ずらな四国の都市化

性を失い、

四

国

デンティティが失わ

本一優しい島四国、

ったことをキーワー

四国四県の各市

一うまい島四国

ع

美しい島四国、 日

日日

日 日本 本

ある。

町村が、個々の地域がある。

町村が、個々の地域がある。

て大切なことであろう。 もてなしへのしつらいとは、我が身と して登録された先進地の今を、時には反 ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ ない。観光産業振興のための開発であっ とにある。決して打算を求めるものでは とにある。